

基調報告

「現在」から始める自立と社会参加に必要な力の育成 ～子ども主体の生活を積み重ねて～

全日本特別支援教育研究連盟 理事長 名古屋恒彦
(植草学園大学名誉教授)

本大会の主題は、「特別な配慮を必要とする子供たちがその可能性を最大限に伸ばすための指導・支援及び、将来の自立と社会参加に必要な力を育成するための適切な指導・支援を目指して」です。

本研究主題の要(かなめ)は、特別な配慮を必要とする子どもへの「指導・支援」のありようを問うところではないかと考えます。それも単なる技術的な議論ではなく、その質を問う議論であると考えられます。

では、その質の側面を、本研究主題はどのようにとらえているのでしょうか。それは二つの点に見出されます。

一つは「その可能性を最大限に伸ばすため」の指導・支援です。可能性とは、その子が未来に向かって有する資質あるいは選択肢とみることができます。

学校教育において未来を考える場合、多くは学校卒業後の社会生活が意識されます。その可能性の幅は、生活年齢が若いほど広く、学校生活の終了が近づくとより具体的に絞り込まれることになります。学校卒業後の未来を描きながら、それぞれのライフステージで、その可能性を子ども自身が最大限追究できるための指導・支援のありようが検討されなければなりません。

一方、学校生活における未来は、学校卒業後だけではなくありません。朝登校してきた子どもたちが、その日の生活に抱く期待感、ワクワク感もまた未来への思いです。そのような、子どもが今、そのときに抱く、今日への期待感もまた、子どもにとっての可能性ということができます。子どもの期待感に豊かに応えうるクオリティのある学校生活づくり・授業づくりもまた、可能性を最適化する指導・支援ということができます。

本研究主題が指向する、指導・支援の質的側面の二つめは、「将来の自立と社会参加に必要な力を育成するため」の適切な指導・支援です。ここには、我が国の知的障害教育が戦後当初から堅持してきた教育目標「自立」が明確に打ち出されています。とりわけ北海道の知的障害教育は、自立論をリアルな社会の中で具体的に見つめ、生きる力を養うことにおいて、今日まで骨太で、しかも細やかな実践を積み重ねてきています。本研究主題も、その良き伝統に根ざしながら、かつこれからのインクルーシブな社会をつくる主体者の育成を目指すものということができます。

なお、「将来の」については、前述のように学校卒業後の将来と、今日を起点とする意味での将来の二つの視点があり、これらは日々のリアルな授業づくりの目標にリンクするものであると考えます。現在の学校生活の充実・発展が、子ども一人ひとりの自立を実現すると考えるのです。

学校もまた一つの社会であり、学校という社会で、その子らしい、その子なりの自立と社会参加が、現在の学校生活において実現されることが必要です。現在の自立と社会参加の実現、つまり、日々の学校生活における主体的な活動の実現と積み重ねが、学校卒業後

の社会における自立と社会参加に自然とつながっていくようにするのです。

学校生活の現在、今において、子どもの主体的な活動を実現するにはどうしたらよいのでしょうか。我が国の知的障害教育には、「できる状況づくり」という実践論があります。

これは、本連盟第3代理事長であり、筆者の恩師である小出進先生が1970年代に提起したものです。

「できる状況」とは「精いっぱい取り組める状況」と「首尾よく成し遂げられる状況」をさし、この状況を、子ども一人ひとりに用意することを「できる状況づくり」と言います。

「精いっぱい取り組める状況」は活動のプロセスにおいてつくる状況であり、「首尾よく成し遂げられる状況」は活動の結果においてつくる状況です。プロセスだけではなく、結果だけでもなく、プロセスと結果のすべてに「できる状況」をつくることで、子どもは自分らしさを発揮し、その子らしく、その子なりに力を発揮します。「できる状況づくり」を積み重ねることで、力の発揮を積み重ね、その力を確かにするのです。

そのように考えるとき、自立の本質は、「できる状況づくり」という支えの下で、その人らしくあれる姿に見出されます。

この意味での自立、つまり適切な支援を前提とした自立であれば、障害の有無や軽重、種類にかかわらず、誰にでも実現可能になります。

そして、その自立は、決して特別支援教育に限定されるものではなく、社会に生きる私たちすべてに当てはまるものと考えます。私たちもまた、適切な支援の下で、自分らしくあれるからです。障害の有無や軽重、種類を問わない普遍的な自立論は、インクルーシブな社会の基本となると考えます。

学校生活の中で、子どもと向き合いながら、その子の、その子らしい生き生きとした姿の実現を願って営まれる、地道で泥臭い実践の積み重ねが、子どもの真の自立と社会参加の実現につながるのです。その意味で、私たちの地道で泥臭い教育実践にこそ、大切な教育的な価値があると考えられます。